

芳ヶ平周辺地域におけるニホンジカ利用状況把握（2）

予算区分：県 単	研究期間：平成30～令和4年度	担 当：企画・自然環境係 坂和 辰彦
----------	-----------------	--------------------

ニホンジカ簡易影響調査（2）

I はじめに

ニホンジカ生息地域は全国的に拡大傾向にあり、樹木や下層植生の衰退、人工林被害が増加している。県内では、平成27年に芳ヶ平湿地群がラムサール条約に登録され、群馬県の重要な自然資源となっているが、今後シカの生息域拡大により、芳ヶ平周辺もシカによる植物資源の劣化が懸念される。

このことから、芳ヶ平周辺地域におけるニホンジカの生息状況を適切に把握し、早期の被害対策の足がかりとするため、本区域内でシカによる立木被害のプロット調査を実施した。

II 方 法

芳ヶ平湿原から野反湖周辺を調査区域とした。区域内に調査ルート（図-1）を6つ設定し、自動撮影カメラを各ルート及び野反湖周辺に計34台設置した（図-1）。ニホンジカによる立木への影響を検証するため、各カメラを設置した立木を中心として、半径10mのプロットを設置し、プロット内の出現種（樹高1.5m以上の生存木）の樹種、本数、胸高直径、被害状況（被害形態、被害高さ、被害幅）を調査した。なお前回調査時に確認した被害を既被害とし、新規被害とは区分した。

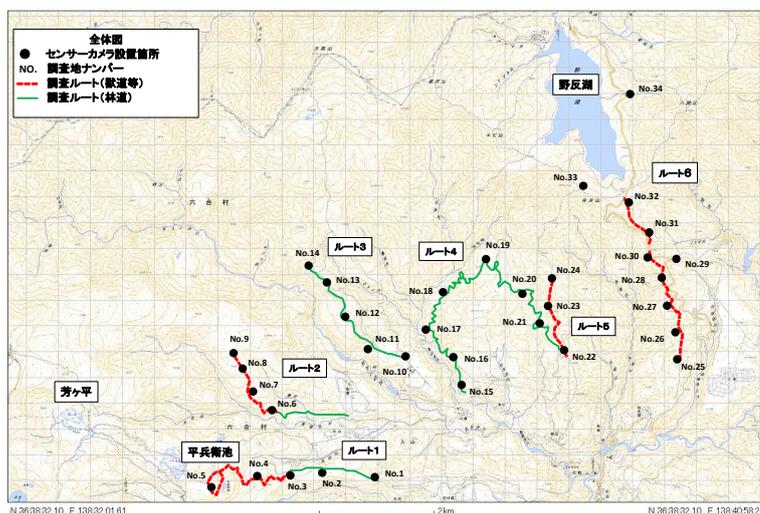


図-1 調査区域全体図

III 結果及び考察

全プロット調査の結果、78種3,526本の出現を確認した。そのうち、シカによる被害のあったものは29種369本であり、被害形態は95%以上が樹皮剥ぎであった。本区域はシカの生息密度が低い（2.32頭/km²）が、立木被害は確認されることが判明した。被害樹種と被害率については表-1のとおりであり、オオシラビソやミズキ、リョウブで新規を含め被害率が高い結果となった。特にリョウブは出現率が高く、剥皮を受けても他樹種のようにすぐに枯死することなく再生するため、シカによる影響を図るのに適した樹種であるといえる。リョウブに関する被害状況は表-2のとおりであり、シカは胸高直径の太いものを優先的に狙うことが確認できた。また剥皮は約200cmの高さまで及ぶこともあった。これはシカは剥皮の際下から引っ張り上げるため、本来口の届かない高さまで剥皮が及んだことが原因と思われる。剥皮幅は、幹周に対する割合で概ね4割程度のものが多く、全周剥皮は約5%にとどまった。今後もプロット調査を継続し、経年変化を追うことでシカの利用状況を調査する。

表－1 被害樹種及び被害率（全区域）

樹種名	被害数(本)		出現数(本)	被害率(%)	
	総本数	うち新規		総被害率	うち新規
オオシラビソ	13	5	31	42	16
ミズキ	9	3	25	36	12
リョウブ	235	74	842	28	9
コミネカエデ	3	0	15	20	0
ヤマツツジ	9	2	47	19	4
コシアブラ	10	3	55	18	5
オオカメノキ	15	8	94	16	9
ウリハダカエデ	5	1	34	15	3
アオハダ	12	4	99	12	4
コハウチワカエデ	11	3	105	10	3
ドウダンツツジ	1	0	10	10	0
サラサドウダン	6	2	70	9	3
オオモミジ	2	0	24	8	0
ネジキ	1	1	13	8	8
ホオノキ	1	0	13	8	0
ノリウツギ	13	2	203	6	1
トウゴクミツバツツジ	3	1	63	5	2
ウワミズザクラ	1	0	21	5	0
マルバアオダモ	1	0	21	5	0
ヤマウルシ	1	0	23	4	0
ヒノキ	1	0	26	4	0
ミズメ	1	0	27	4	0
カラマツ	5	2	215	2	1
ナツハゼ	2	0	88	2	0
アオダモ	2	0	122	2	0
アズキナシ	2	0	143	1	0
ミズナラ	2	0	415	0	0

新規被害は2020年8～9月に調査したもの（前回調査2019年9～10月）
出現数が10本以上確認されたものを記載

表－2 左：被害有無別の胸高直径 中央：被害縦長 右：被害幅（※全てリョウブ）

